

鬼伝説からみる土木技術者の位置づけに関する民俗学的研究

中尾 聡史 (京都大学 大学院工学研究科, nakao@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp)

森栗 茂一 (大阪大学 コミュニケーションデザイン・センター, morikuri@cscd.osaka-u.ac.jp)

藤井 聡 (京都大学 大学院工学研究科, fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp)

Folkloric study about civil engineer in the stories of oni

Satoshi Nakao (Graduate School of Engineering, Kyoto University)

Shigekazu Morikuri (Communication Design centre, Osaka University)

Satoshi Fujii (Graduate School of Engineering, Kyoto University)

要約

本稿では、日本における今日の土木技術者に対する社会的認識の根底の一端を探ることを目途として、日本史における土木技術者の民俗的事実について、非農業文化研究の先駆者である若尾五雄の「鬼」研究を踏まえつつ探索した。議論の前提として、民俗学における土木技術者に関する研究のレビューを行い、土木技術者が、民俗学研究の基本的対象であった常民の枠から外れた者として分類され、特殊職業民、漂泊民、被差別民などの非常民として理解されていることを指摘した。そして、非常民である鉦山師が鬼と呼ばれていたことを示唆する鬼退治伝説の存在と、五郎兵衛用水を事例に鉦山師のもつ鉦山技術が隧道掘削の土木技術に転用されていたことを指摘し、これらを通して土木技術者が「鬼」と呼ばれていたという民俗的事実を指摘した。

キーワード

鬼, 土木技術者, 鉦山師, 金堀, 五郎兵衛用水

1. はじめに

公共事業の重要性は、近年、一層高まっている。東日本大震災や熊本地震からの復興はもちろんのこと、近い将来に発生が予想されている首都直下型地震や東海・東南海地震など、日本に致命的な被害をもたらしかねない震災への備えとしても、公共事業の実施は必要不可欠であると言える。また、日本経済は長らくデフレにより経済的低迷を続けており、デフレ脱却への景気対策としても公共事業の重要性が指摘されている (e.g. 藤井他, 2012)。

しかしながら、田中他の一連の研究 (2013a; 2013b; 2014; 2015) では、日本国民が社会情勢を捉える上で重要な情報源である新聞の論調が、公共事業の実施に対して批判的である傾向が示されている。また、メディアにおいてネガティブなイメージが流布されてきた公共事業に対して、国民の間にもネガティブな印象が定着していることが指摘されている。そして、公共事業に関するネガティブ報道の傾向は、90年代前半からみられ、90年代後半から2000年代前半にかけての行政改革や小泉改革の際には、そのピークを迎えていることが示されている。すなわち、ここ20年の間に、公共事業に対するネガティブな報道によって国民の間にも公共事業に対する否定的なイメージが形成され、公共事業に対する批判的な世論が形成されたと指摘されている。そして、2000年頃から我が国の公共事業費は縮小傾向にある。大石 (2012) によれば、「これほどのスピードで公共事業費を削減していった例は、世界の国々のどの歴史をみても皆無 (p.162)」で

あり、むしろ「わが国のみが一方向的に公共事業費の削減を続けている間、EUやアメリカの首脳は、自国の競争力強化や雇用確保の観点から社会資本整備を充実させる方針を相次いで明らかにしている (p.178)」のが実態である。

つまり、日本のようなスピードで公共事業費を削減した例は、世界の国々のどの歴史をみても存在していないにも関わらず、また、日本において公共事業の必要性が高まっている状況にあるにも関わらず、日本では、いわゆる公共事業批判が展開されている状況にある。もちろん、公共事業批判の背景には、利権によって必要性が十分に明らかでない土木施設が作られてきたのではないかとこの社会的認識、さらには、土木施設が発揮してきた公益増進の側面が理解されていないという社会的状況があることは十分に考えられるが、ここには、日本特有の理由が存在する可能性は否定できないものと考えられる。

日本における土木バッシングの背景を探る先行研究として、先述の新聞報道の分析による研究 (田中他, 2013a; 2013b; 2015) や、社会心理学や政治心理学からの研究 (羽鳥他, 2009; 水野他, 2008; 矢野, 2003)、オルテガの大衆論からの研究 (羽鳥他, 2008) など、様々な角度から実証的な研究がなされているが、これらの研究は、日本特有の理由を説明する論理には至っていない。

そこで、本研究では、こうした土木バッシングの深層には、これまで等閑視されてきた、土木を拒否する日本特有の精神文化が関係しているのではないかと考え、民俗に着目した。民俗とは、世代的伝承性をもって近代まで引き継がれてきた遺習としての慣習のことである。「習い積って俗となる」という言葉があるように、先代から引き継がれてきた慣習は、合理的な説明は十分につかなくにしても、日常生活として無意識的に我々の肌に滲み

つき、民俗となっている。本研究では、こうした民俗に着目し、日本における土木バッシングの背後にある民俗的理由を探索することとしたい。

既往研究としては、筆者らによる中尾他（2015; 2016）の研究がある。中尾他（2015）は、これまでの民俗学、歴史学の成果を再構築・再解釈しながら、現在の土木バッシングの基底にある日本人の潜在意識について探索している。そして、土木にまつわる差別と呪術性の問題に着目し、地鎮の呪術を持った河原者や非人などの被差別民が土木事業に関わってきた歴史を整理する中で、日本人の深層意識にあると考えられる「土木に対するケガレ意識」の存在を指摘し、これが現在の日本特有の土木バッシングの民俗学的理由を形作っていることを示唆している。また、中尾他（2015）は、土木改名論の変遷を辿る中で、土木が不当な扱いを受ける理由として世間一般の土木従事者へのイメージの悪さが関係しているということが、土木学会創立当初から指摘されてきたことを確認している。

そこで、中尾他（2016）は、現代における土木バッシングの理由を探るため、現場で実際に作業をした土木技術者の民俗的事実（歴史実証はできないが、総体としての了解性）について、河童の伝承に着目しながら論じている。そして、河童人形起源譚における河童とは、河原を拠点として治水工事などに関わっていた河原者や非人、黒鉄などの土木技術者であったことを様々な文献を提示しながら論証している。

本研究では、こうした中尾他（2015; 2016）をさらに発展させることを企図し、鬼伝説に着目することで、今日の土木技術者に対する社会的認識の根底の一端を探ることとしたい。そこで、本研究では、独特の地域社会分析の視点で鬼伝説に関する研究を行った若尾の研究（1985; 1988; 1989）、ならびに若尾の研究成果を現代における差別との関わりの中で論じた森栗の研究（1995）に依拠しながら論を展開する。

2. 若尾五雄の民俗研究の位置づけ

ここではまず、民俗学の動向を簡単に整理する中で、民俗学における若尾五雄の民俗研究の位置づけを記しておく。そこで、2.1では民俗学について、2.2では民俗学の基礎概念とされる常民について、簡単に説明した上で、2.3において、民俗学において土木技術者がどのような位置づけにあるのかを明確にするとともに、若尾五雄の民俗研究の位置づけを示すこととする。

2.1 民俗学とは

近代化の発展の中で、農村が疲弊し、長年蓄積されてきた文化や伝統、また、それに対する誇りが急速に廃れつつあった昭和初期、民俗学は、柳田国男（1875～1962）によって提唱された。大きな歴史の流れから取り残されているように見えるごく普通の人々にも歴史があり、たとえ年代が明確にならずとも、そうした人々の生活や意識の変化から、日本の歴史文化を捉えることの重

要性を柳田は主張した（柳田，1998，pp.201-206）。

民俗学とは、『日本民俗大辞典』の定義に従えば、「一定の集団を単位に上の世代から伝えられてきて、現在人々が行為として行い、知識として保有し、観念として保持している事象、すなわち民俗を調査・分析し、世代をこえて伝えられてきた生活文化およびその変化過程を明らかにすることで歴史的世界を認識する方法（福田，2000，p.640-642）」と説明されている。すなわち、民俗学は、世代的伝承性をもって近代まで引き継がれてきた遺習としての慣習や民話などの民俗を史料として、人々の生活の歴史過程を捉えようとする学問であると言える。

また、柳田は、民俗学について「我々の学問は結局世の為人の為でなくてはならない。即ち人間生活の未来を幸福に導くための現在の知識であり、現代の不思議を疑ってみて、それを解決させるために過去の知識を必要とするのである（柳田，1998，p.216-217）」と主張しているように、現実問題の解決に役立てるといふ実践政策学的な目的を民俗学という学問の目的として定位していた点に、柳田が提唱した民俗学の本質を見て取ることができよう。

2.2 常民とは

ここで問題となるのが、こうした慣習や民話等の民俗を担っているのは、どのような人々であるかということである。先述した『日本民俗大辞典』の「民俗学」の項において、それは「一定の集団」とされているが、柳田は民俗の担い手として「常民」という概念を持ち出している。この「常民」とは、柳田による造語であり、学史上、さまざまな議論がなされているが、一応の共通理解として、実体概念と抽象概念があるとされている（宮田，1983，pp.270-272）。ここでは、混乱を避けるため、実体としての「常民」について言及したい。

柳田が民俗学の方法論について論じた数少ない著書の中の一つである『郷土生活の研究法（1935）』において、「常民」とは次のような分類に従って説明される（柳田，1998，pp.301-303）。村落の構成員は、「上の者」「下の者」そしてこれらの中間にあたる「常民」の3つの階層に区分できる。「上の者」にあたるのが、「いゝ階級に属する所謂名がある家で、その土地の草分けとか又は村のオモダチ（重立）と云はれる者、或はまたオホヤ（大家）・オヤカタ（親方）などゝ呼ばれてゐる階級」であり、江戸時代の半ばまで村の中心勢力をなしていた階級である。一方、「下の者」にあたるのが、「普通の農民でなく、昔から諸職とか諸道などゝいつて、一括せられてゐた者」であり、具体的には「鍛冶屋、桶屋など、これらは何れも暫くづつ村に住んでは、また他に移って行く漂泊者」である。そして、この二つ階層の中間にあたるのが、村の住民の大部分を占めていた「極く普通の百姓」であり、これが「常民」である。

すなわち、「常民」とは、日本人の大半を占めていたとされる水田稲作に従事する農業民のことであり、中世末から近世にかけて平地部に定着し、江戸時代には日本人の人口の約7割を占めていたとされる人々のことを指

す(宮田, 1983, pp.270-272)。柳田は、日本の人口の大半を占めていたこの「常民」の持つ民俗体系に着目すれば、総体的な日本文化も捉えられると考え、1930年代頃から「常民」に焦点をあてるようになったのである(宮田, 1977, pp.241-265)。つまり、柳田は、日本文化を為政者の側からの視点ではなく、「常民」の側から捉えようとして膨大な著作を残した。この「常民」に焦点をあてることで、日本人の家制度や祖先に対する観念の分析において柳田民俗学は、大きな成果を収めたのである。

2.3 民俗学における土木技術者の位置づけ

さて、定着農業民である「常民」に対して、先述の分類の「下の者」に当たる非農業民、特殊職業人のことを民俗学では非常民、漂泊者(漂泊民)と呼ぶことがあり、この中に被差別民が含まれる(宮田, 1985, pp.82-94)。後年の柳田民俗学において、常民研究が主流となり、この非常民に対する研究が十分にこなされたことは、しばしば指摘されるところである(c.f. 宮田, 1977; 門馬, 1998)。宮田(1977)は、「こういう初めから除外する部分があった上で常民が存在するのであり、こうした常民を主流とした日本民俗学は、当初から一つの限界をもってきているといえる(p.244)」と従来の民俗学を厳しく批判している。ただし、前期の柳田民俗学においては、『遠野物語(1909)』『山の人生(1926)』に代表される「山人」研究や、『所謂特殊部落の種類(1913)』『毛坊主考(1914)』などの「特殊部落」研究が行われており、決して非常民に関する研究が等閑視されていた、というわけでもなかった。

こうした非農業民を扱った前期の柳田民俗学の中でも、特殊部落研究において、土木技術者に関する若干の記述がみられる。柳田は、一貫して被差別民に対して「漂泊者」という分類の中で捉えているが(門馬, 1998)、『毛坊主考(1914)』において、井戸掘りや池作りなどの特殊な土木技術を携えた人々を漂泊する被差別民であることを示唆している(柳田, 1975, pp.363-365)。つまり、柳田は、土木技術者を、定着農業民とは違う「漂泊民」「被差別民」といった非常民として捉えていたことが考えられる。また、比較的早い段階において、こうした指摘を行ったものとしては、民俗学者でありながら日本銀行総裁を務めた渋沢敬三(1896-1963)の「本邦工業史に関する一考察(1933)」が挙げられる。渋沢は、土木技術をもった「黒鍬」や「河原者」などを、特殊な工業に関わっていた漂泊民として捉えており、彼らは「特殊部落の人民であり「下り職」として卑しめられ」ていたと述べている(渋沢, 1992, pp.263-265)。このように、民俗学において、土木技術者は定着農業民である常民の枠から外れた者であり、特殊職業人、漂泊民、被差別民などの非常民として理解されているのである。

しかし、先述したように、1930年頃から柳田の関心は常民の研究に注がれるようになり、また、民俗学が柳田によって主導されてきたこともあり、民俗学において非常民に対する研究が十分にこなされたと言える。

市川(1991)は、これまで「工事現場で実際の作業に従事した無名の人々の歴史についてはほとんど研究の目が向けられることはなかった(p.1)」と指摘するが⁽¹⁾、非常民である土木技術者に関する研究が遅れているのは、民俗学が常民を研究の基本的対象としたことと決して無縁ではないであろう。

1980年頃になり、ようやく中世賤民史や技術史の立場から土木技術者に関する比較的まとまった研究が、三浦(1981; 1984; 1990)によって提出されるようになる。三浦もまた、土木技術者は、「坂の者」や「河原者」といった中世被差別民であり、交通の要所を拠点として活躍した非農業的集団であることを推察している(三浦, 1990, pp.35-39)。三浦は、1936年に土木学会から提出された『明治以前日本土木史』の論調が「土木工事に専従する社会集団はまだ成立しておらず、土木工事は、農民による農業労働の延長としてとらえることができる(三浦, 1984, pp.124)」という見解に基づいていることに疑問を呈し、中世における土木工事を専門とする社会集団の存在を指摘した。

ただし、市川(1991)は、こうした三浦の研究にも、史料的な問題から一定の限界があることを指摘している。史料的な限界がある中で、市川は、近世尾張で活躍した土木技術者である黒鍬が、中世の京都で活躍した下級の陰陽師(千秋万歳など多様な芸能を身につけた一種の被差別民)の系譜にあることを推察している。地鎮の呪術を持つ陰陽師が、その呪術的能力から土木工事に関係しており、結果として土木技術を持ち合わせていた可能性を示唆し、この土木技術が黒鍬へ継承されたことを、断片的な史料と伝承から見出している。そして、市川は、「日本の土木の歴史を考える時、呪術性と差別の問題は、かかすことのできない重要な要素として強く認識されるべきであろう(市川, 1991, p.12)」と、土木技術者に関する歴史民俗研究に対して重要な視点を提示している。

市川の研究に先立って、近世における日本人の自然観と開発について説いたのが三鬼清一郎の研究(1984, 1987)である。三鬼(1984)は、日本において古くから地鎮の祭儀が執り行われていた事実から、「土地には地の神が宿り、それを含めた自然界すべてに神々が宿る(p.181)」と考えられていたことを指摘し、日本において「自然景観に人為的変更を加えることは、地の神の怒りにふれることと観念されていた(pp.181-182)」ということを推察している。そして、こうした観念があったがために、地鎮の呪術を持つ一種の被差別民であったと考えられる下級陰陽師が近世初期における開発に動員されていたと推察している。

2.4 若尾五雄の民俗研究

一方で、民俗学で定義する非常民に関して、文化人類学でも異人論として位置づける研究がなされてきた。文化人類学の立場から民俗学に接近した小松和彦は、定住民である常民にとって、彼らの世界の外部に住み、様々な機会を通じて接触する非常民は、異人視される立場

にあるとの見解に立った上で、異人である非農業民の存在が妖怪にまつわる民話を創り出す一つの大きな基盤になっていると指摘している（小松，1983；1985；1986；1995）。そして、小松は、妖怪の中でも河童に関する民話には、土木事業に実際に関わった河原者や非人などの非農業民の姿が暗示されていることを示唆している。この河童の民話の背後に実在した土木技術者の姿があるという着想をいち早く提示したのは、産婦人科の開業医でありながら、非農業的世界の民俗研究に励んだ若尾五雄である。

若尾五雄は、民俗学会において、あまり注目されることはなかったが、早くも1950年代から非農業文化研究に着手していた異端の民俗学者である。若尾の研究対象は、河童といった妖怪をはじめ、橋姫、人柱、えびす、犬飼、妙見など、非農業世界と深くかかわりのあるものであり、此世と異界を媒介する境界領域の存在が多い。こうした非農業世界から歴史を見るところに若尾の民俗研究の特徴がある。そして若尾の民俗研究のもう一つの特徴は、「それぞれの伝承の底流にはいろいろの思いやそれぞれの背景を持つ、つまり史上の事実の一部が織り込まれて伝えられて来ているのが伝説だと思わねばなりません（若尾，1985，p.171）」と若尾が語るように、民話が語り継がれる背後には、それを裏付ける地理的・歴史的な事実が存在すると思われるところにある。若尾は、徹底したフィールドワークを行い、地域に残る伝承の背後にある地理的・歴史的な事実を追い求めたのである。こうした若尾の研究は、河童が土木技術者を示唆していたという研究（若尾，1989）に見られるように、地域に残る伝承や伝説を、土木という非農業世界と結び付けて職能集団や技術の歴史を推測する視点にあふれている。

本研究では、今日の土木技術者に対する社会的認識の根底の一端を探ることを企図し、この若尾五雄の代表的研究ともいえる「鬼」研究の成果（若尾，1981；1985）、ならびに若尾の研究成果を現代における差別との関わりの中で論じた森栗の研究（1995）に依拠しながら論を展開することとしたい。

3. 鬼伝説にみる民俗的事実

ここでは、若尾五雄の鬼研究の成果に基づいて、鬼伝説の背後にある民俗的事実について探索する。3.1では鬼の概要について、3.2では若尾五雄の鬼研究について述べる。また、3.3では、鉱山技術と土木技術の関係を説き、鬼と土木技術者の関係について論じる。

3.1 鬼の概要

『日本民俗大辞典』において、「鬼」は、「人々に危害を加える邪悪な霊や死者のイメージを基本としながら、人々に祝福をもたらす属性をも合わせもった人格的な存在（池上，2000，p.271）」と説明される。

鬼にまつわる伝説といえば、桃太郎の鬼退治の話が有名であるが、ここには追われて退治される鬼の姿が描かれている。民俗学者の折口信夫は、春来る鬼として、祝

福をもたらす鬼を紹介し、鬼には、追われる鬼以外にも本質があると論じた（折口，1976）。折口は、古代の和語の段階では、カミとオニが同義であったという説を提唱し、時代変化のなかで、恐怖のイメージや悪の性格のみが鬼に集約されるようになったと考えている（折口，1966）。

実際、現代の我々の日常にあふれている鬼のつく言葉を挙げてみると、鬼気、餓鬼、鬼畜、鬼おこぜ、鬼やんま、鬼ごっこ、疑心暗鬼、神出鬼没、鬼に金棒、鬼の目にも涙など、鬼には、恐怖のイメージや悪の性格がつきまとっていることが分かる。

小松（2000）は、「鬼」とは「日本人が抱く「人間」の否定形、つまり反社会的・反道徳的「人間」として造形された概念・イメージ」であると指摘し、鬼の性格の本質は、「怪力・勇猛・無慈悲で、恐ろしい」という風を集約できると述べている。鬼のつく言葉を思い返せば、これらの言葉に、小松が指摘するような鬼の性格の本質を見て取ることができよう。また、小松は、日本において「鬼」は、文献にその語が登場したときから現代まで、「恐ろしい存在」であるという点は変わっていないと指摘している。そして、日本人は、雷などの恐ろしい自然現象を「鬼」と比喩的に表現する場合もあったし、言語が違う異民族や、共同体に敵対する人々を恐ろしい存在として「鬼」と表現する場合があったことを指摘している。柳田国男もまた『毛坊主考』の中で、鬼の一部に、山人や漂白の人々の存在があることを指摘している（柳田，1970）。すなわち、日本の民俗世界には、自分たちとは異なる人間を鬼と表現する習俗があったことが考えられるのである。

3.2 若尾五雄の鬼研究

本節では、若尾の鬼研究についてみていく。ここでは特に、若尾の著書『鬼伝説の研究（1981）』『金属・鬼・人柱その他（1985）』に着目して、鬼伝説の背後にある民俗的事実に迫ることとしたい。

若尾の鬼研究は、若尾の妻の実家が、鬼伝説の残る佐佐福神社（鳥取県日野郡日南町）であったことに端を発している。佐佐福神社には鬼退治の伝説が残っており、その伝説を簡単に述べると、孝霊天皇が日野郡にやってきて、人民を悩ませていた鬼を退治したというものである。若尾は、なぜこの地域に鬼伝説が残っているのかを探索していく中で、この地域が一大砂鉄地帯であるという事実に着目する。また、この日野郡は、現在の広島県と岡山県の県境にあり、桃太郎の鬼退治で有名な吉備国に接している。桃太郎の鬼退治とは、宝物を盗んだ悪人の鬼を、桃太郎が退治して宝物を取り返しに行くという話であるが、若尾は、ここで、鬼は宝物を奪ったのではなく、鬼の住むところにこそ、金、銀、鉄、珠玉などが眠っているのではないかと考える。そして、若尾は、吉備津神社の宮司に話を聞き、やはり予想通り、吉備国が金工地帯であるという事実にとどりに着く。

若尾は、さらに、鬼退治伝説の一つである丹波国大江山の酒呑童子伝説にも着目し、現地に行って調査し、大

江山が一大鉱山地帯であることを突き止めている。その他にも若尾は、鬼が語られる神社仏閣や鬼の名前がつく地名には鉱山が関係していることを例示し⁽²⁾、鬼とは、金、銀、鉄を掘り起こす鉱山技術を持った鉱山師である可能性を指摘している。こうした若尾の鬼研究は、単なる民話構造研究ではなく、歴史学的にも実証される鉱山技術者集団の実相に迫るものである。

若尾は、鬼と鉱山師の関係を発見していく過程で、鬼は隠であり、隠は地中の鉱物であると言ったり、吉備とは巖（きび）のことで堅い鉱物のことだと言ったり、何事も字義と鉱物という物質で理解するあまり鉱物を巡る人間関係、すなわち「差別」などの問題については考察が及んでいないと森栗は指摘する。森栗（1995）は、先述の佐佐福神社の鬼退治伝説から民俗的歴史を類推しており、そこには、孝霊天皇の大和政権の統一事業という歴史事実があり、山中で高い鉱山技術を持っていた地方文化への、中央の朝廷権力の侵略があったことを示唆している。つまり、桃太郎の金銀財宝を持って帰る話も、稲作文化を中心とした大和朝廷の圏域拡大における鉱山・山地・地方文化への収奪であるというのが森栗の見解である。そして森栗は、「古代のこの侵略という事実は負ける側を鬼として差別して伝承してきたのであった。伝承の視点はいつも権力側にあり、稲作にあり、中央にあった（p.42）」と述べている。

こうした侵略という形で鬼退治が実際に起こった地域は一部であり、若尾も述べているが、鬼退治伝説の残る地域すべてにおいて、鬼すなわち鉱山師を追い払うようなことがあったと必ずしも言えない。しかし、以上に指摘した諸事実を踏まえるなら、若尾が指摘したように鬼退治伝説の残る地域の多くに鉱山地帯があったことは事実であると同時に、土を掘り起こしていた鉱山師が異人視され、鬼という妖怪に見立てられていたことが推察される。鉱山という異界に住む非常民を異人と捉え、時に畏怖し、時に差別する精神文化が日本において存在していたことを、こうした鬼伝説は暗示していることが考えられるのである。

3.3 鉱山技術と土木技術

このように鬼と呼ばれることもあったと考えられる鉱山師であるが、その一方で、鉱山師の技術が土木技術として転用されていたことが、五郎兵衛用水の隧道掘削の土木技術に関する研究から明らかにされている。

五郎兵衛用水（長野県佐久市）とは、江戸時代初期（1624～1643年）、水田開発のために市川五郎兵衛真親によって開削されたとされる全長約20キロメートルにも及ぶ用水路のことである。用水路は、三つの山を貫いており、その中でも一番長い片倉山隧道は東西に320メートルにも及んでおり、山の両側から掘り進められたと言われている。

川元（1991）は、この五郎兵衛用水の隧道掘削の過程を物語にするため、山の両側から掘り進めて、地中で結ばれる隧道の掘削技術・測量技術について調査を始める。

しかし、五郎兵衛新田に関する3万点にも及ぶ古文書を読み漁るが、用水開発期間の史料は皆無に等しく、また、土木技術の専門家を尋ね、土木技術史の文献を読んでも、この隧道掘削技術に関する文献は見つからなかったという。山の両側から掘り進める隧道掘削技術が用いられているのは、五郎兵衛用水の他に箱根用水もあるが、どちらの土木技術も解明されておらず、川元は「現に存在する用水の、隧道工事の技術が究明されようとする土木技術史とはいったい何なのか（p.7）」と、これまでの土木技術史を批判している。

こうした中、江戸時代中期に、五郎兵衛用水の隧道が崩れた際に、小諸藩に出された請求書に、修復工事をするのには「金堀（金山衆）」が数名必要であること、その理由として隧道をまっすぐ掘り進むには「金堀（金山衆）」の技術でしかできないことが書かれていることを川元は発見する⁽³⁾。「金堀」とは、金山や銀山などの鉱山で働く鉱山師のことで、15世紀末に書かれた『七十一番歌合』では賤業者として描かれている。

そこで、川元は、佐渡の金山の調査を行い、鉱山労働者が鉱道を掘り進めていく途中で酸欠によりバタバタと倒れる現象が起こること、佐渡ではこの現象を「ケダヘ」と呼んでいることを発見している。この「ケダヘ」を防ぐために、金堀は、外部から地中の鉱道に向かって最短距離で空気穴を掘り当てる技術を持っており、この技術が、五郎兵衛用水の山の両側から掘り進める技術に転用された可能性を川元は推測している。つまり、金堀の持つ鉱山技術が五郎兵衛用水の隧道掘削という土木技術に転用されていたというのである。

鉱山技術と土木技術の関係については、小葉田（1968）も指摘しているところであり、小葉田は、「甲斐は急流が多く、築堤治水の土木工事は信玄時代に注目すべきものであったが、これらの土木技術は鉱山技術と深い関係がある（p.52）」と述べており、金堀集団と土木集団との近似性を主張している。甲斐国内およびその隣接地域の金山開発が、武田信玄の時代に急速に展開したことはよく知られているが、そこで展開された技術と、武田信玄の時代およびそれ以降における築堤治水技術は無関係ではないであろう⁽⁴⁾。斎藤（1990）もまた、市川五郎兵衛の市川家が、甲斐の金山衆か、それに近い存在であったことを指摘しており、甲斐の金堀が五郎兵衛用水の掘削工事に関わった可能性を示唆している。

さて、川元は、五郎兵衛用水の土木工事に関わった技術者として、金堀を挙げているが、その他にも石切（石工）の存在を指摘している。というのも、五郎兵衛用水を計画した市川五郎兵衛の本家市川家が、上州砥沢村で砥石山の経営をし、砥石を生産していた事実があり、そこで働いていた石切（石工）が用水路開削という土木工事に導入されていた可能性が推測できるからである。この石切は、石臼の制作だけでなく、石垣造りなどの一種の土木工事にも関わった人々であり、武田氏の治水事業に参加していたことが推測されている（笹本，1988，p197）。また、石切は、1400年代に制作されたとされる『三十二

『番職人歌合』において賤業者として描かれており、金堀と同様に、中世において一種の差別を受けていた人々であることが考えられる。斎藤（1990）もまた、五郎兵衛用水を掘削したのは、「金堀ないしは石切だったことはまちがいないのではないか（p.64）」と推察しており、「それらの人々が、中世において「賤民」ないしはそれに類するとされた人々だった（p.64）」と述べている。

つまり、五郎兵衛用水の開削工事に関わった人々は中世において賤民として描かれており、一種の差別を受けていたと考えられる金堀や石切（石工）であり、特に金堀（金山衆）の持つ鉱山技術が、五郎兵衛用水の隧道掘削に活用された可能性が考えられるのである。

3.2で論じた、鉱山師が「鬼」と呼ばれていたということ、ならびに、本節で論じた、鉱山師の技術が新田開発や治水などの土木事業に活用されていたということ、この二つを繋ぎ合わせると、土木技術者が「鬼」と呼ばれていたという民俗的事実が考えられる。つまり、鉱山技術は土木技術であることを踏まえると、直接その資料はないが土木技術者が鬼と呼ばれることもあったことが十分に考えられよう。今後はこの可能性を確認するためのさらなる調査が必要である。

4. おわりに

4.1 本研究のまとめ

本研究では、今日の土木技術者に対する社会的認識の一端を探ることを目途として、鬼伝説の背後にある民俗的事実について、非農業文化研究の先駆者とも言える若尾五雄の研究を踏まえつつ考察した。

本研究ではまず、2.にて、民俗学の動向を整理する中で、民俗学における土木技術者に関する研究の簡単なレビューを行い、その中で、土木技術者の位置づけについて論じた。そして、土木技術者は、民俗学研究の基本的対象であった常民の枠から外れた者であり、特殊職業人、漂泊民、被差別民などの非常民として理解されていることを指摘した。

その上で、3.にて、非常民である鉱山師が鬼と呼ばれていたことを示唆する鬼退治伝説の存在と、五郎兵衛用水を事例に鉱山師のもつ鉱山技術が隧道掘削の土木技術に転用されていたことを指摘し、これらを通して土木技術者が「鬼」と呼ばれていたという民俗的事実を指摘した。

こうした鬼伝説は、中尾他（2015; 2016）にて指摘した土木技術者を賤民として蔑み、異人視する日本人の差別意識の存在を改めて暗示しているものと考えられる。土木技術者が果たしてきた地域開発貢献はあらかた記録されることもなく忘却されてきたが、土木技術者に対する差別意識のみが、日本人の深層意識に隠れており、鬼伝説とともに今なお我々の生活の中に息づいていることが考えられよう。

4.2 今後の課題

3.2で紹介した五郎兵衛用水の土木技術を調査した川元祥一であるが、その調査に基づいて、五郎兵衛用水の隧

道掘削に励んだ土木技術者の物語『希望の草原—五郎兵衛用水物語』（1990）を描いている。そこでは、差別を受けながらも、隧道掘削に励む金堀（土木技術者）の姿が描かれている。川元は、限られた史料から推測を行い、工事に関わった土木技術者の生きざまを物語として描いた。こうした川元の業績は歴史実証主義の立場からは決して評価されるものではないであろう。しかし、言うまでもなく「歴史」というものは、単なる史料の集積をはるかに超えたものであることは事実である。例えば、土木学会誌において、高橋裕は「土木史というのは、単なる歴史の羅列ではなく、技術者の生きざまを伝えること（高橋, 2016, p.17）」であると述べているが、こうした指摘を踏まえるなら、歴史とは、ある時代の中に生きた人間の人生や経験といった生きざまを伝えるものであるとも言えるのである。

事実、『忘れられた日本人』を著した民俗学者の宮本常一の遺した業績はまさに、庶民の生きざまを伝えるものであった。宮本は「一人一人の一見平凡に見える人にも、それぞれ耳をかたむけ、また心をとどろかすような歴史があるのではないかと思った（宮本, 1993a, p.93）」と述べている。

そんな宮本の業績の中には、宮本が昭和初期に西条高原で出会った石工（一種の土木技術者）から行った以下のような聞き書きがある。

「金をほしうてやる仕事だが決していい仕事ではない。ことに冬など川の中などでやる仕事は、泣くにも泣けぬつらいことがある。子供は石工にたくはなない。しかし、自分は生涯それでくらしたい、田舎をあるいて何でもない田の岸などに見事な石のつみ方をしてあるのを見ると、心をうたれることがある。こんなところにこの石垣をついた石工は、どんなつもりでこんなに心をこめた仕事をしたのだろうと思ってみる。（中略）つきあげてしまえばそれきりその土地とも縁はきれる。がいい仕事をしておくとたのしい。あとから来たものが他の家の田の石垣をつくるとき、やっぱり粗末なことではできないものである。まえに仕事に来たものがザツな仕事をしておくと、こちらもついザツな仕事をする。（中略）結局いい仕事をしておけば、それは自分ばかりでなく、あとから来るものもその気持ちをうけついでくれるものだ。（宮本, 1987, pp.24-25）」

そして、宮本は、この石工の言葉を受けて、次のように語っている。

「だれに命令せられるのでもなく、自らが自らに命令することのできる尊さを、この人たちは自分の仕事を通して学び取っているようである。権威のまえには素直であるが、権力には屈しない。そういう人間的な生き方をもつてみると、この人たちにとって恐ろしいものは権威であり真理だけであるようだ。そうしたものをこの人たちは無意識のうちにもっている。そしてその

総和が目のまえにある「かたちある文化」なのだと思う（宮本, 1987, p.26）」

宮本が書き記したこうした言葉は、まさに、土木技術者の生きざまを伝えるものといえるのではないかと筆者らは考究する。今後の土木史を考えるにあたって、こうした記述を収集し、土木技術者の姿に迫る作業も必要ではないかと思われる。

ただし、宮本は別稿において「土木建築の工事がなされても、讃えられるのはその工事を直接担当した大工や石工ではなく、その工事を計画し出資した人であった（宮本, 1993b, p.222）」と述べ、我が国において「技術者軽視」の風潮が存在していることも指摘している。宮本の指摘の通り、本研究で取り上げた五郎兵衛用水の事例にしても、工事を計画し出資した市川五郎兵衛真親は、その名が用水の名称に取り入れられ、讃えられる一方で、現場で汗を流した土木技術者については、全くと言っていいほど記録されず、忘却されている。

この「技術者軽視」の問題は、本研究で明らかにしてきた土木技術者への差別意識の問題でもあり、こうした風潮が古くから存在していたことで、土木技術者に関する史料はかなり限定的なものになっていることが考えられる。ただし、こうした史料的な限界がある中で、非農業世界に生きた土木技術者の姿を追うには、若尾五雄のもつ民俗研究の視点が大きい役立つであろうと考えられる。本研究は、若尾の鬼研究に着目することで土木技術者の歴史に迫ったが、若尾の研究対象は、鬼や河童といった妖怪だけではなく、松浦佐用姫の人柱伝説や土木工法などの非農業世界に及んでいる。今後、こうした若尾五雄の遺した民俗研究に光を当て、土木史を構築していく作業が必要であると考えられる。

注

- (1) これまで、空海や武田信玄、豊臣秀吉、角倉了以などが、卓越した土木知識や土木思想を持っていたことは指摘されてきた (e.g. 長尾, 1985)。しかし、彼らは、工事を出資し計画した人々であり、工事現場で実際に働いた人々ではない。現場で汗を流した人々の歴史は等閑視されてきたのである。
- (2) 若尾は、中国・近畿地方だけでなく、全国的に踏査し、鬼と金工が深い関係にあることを論じている (若尾, 1985, pp.76-82)。
- (3) ここで、川元は、隧道掘削は金堀しかできないことを述べているが、この一次資料について明示していない、おそらく、川元が発見した史料は、五郎兵衛新田古文書の1682年の新規掘貫工事の見積書のことと考えられる。そこには、五郎兵衛用水の隧道は「金堀」によって掘られたことが記されており、また、隧道を掘るには、岩を掘りぬく必要や真っ直ぐに掘り進めていく必要があることから、隧道掘りは「金堀」しかできないことが記されている。ただし、斎藤 (1990) は、1666年の「おからかき掘貫新規掘鑿入用借用願書」の「岩ニテ御

座候へハ、かねほり・石切ニテほり不申候へハ不罷成候」（かねほり・石切が掘らなければ隧道は作れない）という文書の存在を挙げ、金堀だけでなく石切もまた、掘貫を掘る専門家であることを説いている。

- (4) 鉾山と築堤は、同じ尾張鉾という名の先の尖った鶴嘴型の工具を使う (森栗, 2000)。また、坑道のなかに落盤を防ぐ井桁を組むが、その技術と堤防の杭打ちにも関連した技術があると考えられる。こうした技術は井戸掘りの技術とも関係しており (森栗, 2003)、これらの共通点として、土を深く掘り進める技術であることが分かる。こうした技術を持った非常民は、需要に応じて、井戸を掘ったり、隧道を掘ったり、また池や堤を作ったり、さらには鉾山開発にも関わったものと考えられる。また、笹本 (1988) は、武田氏や今川氏、織田氏、豊臣氏などの戦国大名の配下には、黒鉾や金堀などの職人がいた事例を挙げ、城攻めに際して、城中の井筒を掘り進めて水を絶つなど、土木技術が戦にも利用されていたことを指摘している。戦国大名の中には、武田信玄や織田信長のように高度な土木知識、土木思想を持った武将がいたことが知られているが、彼らを支えたのは、優れた土木技術を持つ非常民であったことが考えられる。また、戦国時代という激動の時代を通して、土木技術、鉾山技術は大きく進展したものと考えられる。

引用文献

- 藤井聡・柴山桂太・中野剛志 (2012). デフレーション下での公共事業の事業効果についての実証分析. 人間環境学研究, Vol. 10, No. 2, 85-90.
- 福田アジオ (2000). 「民俗学」, 福田アジオ編, 日本民俗大辞典 (下). 吉川弘文社.
- 羽鳥剛史・小松佳弘・藤井聡 (2008). 政府に対する大衆の反逆—公共事業合意形成に及ぼす大衆性の否定的影響についての実証的研究—. 土木計画学研究・論文集, Vol. 25, No. 1, 37-48.
- 羽鳥剛史・藤井聡・水野絵夢 (2009). 政府の公共事業を巡る賛否世論の政治心理学的分析. 交通工学, Vol. 44, No. 5, 55-65.
- 市川秀之 (1991). オワリ衆の伝承を追って—近世の池構築造技術者集団—. 近畿民俗, Vol. 125, 1-15.
- 池上良正 (2000). 「鬼」, 福田アジオ編, 日本民俗大辞典 (上). 吉川弘文社.
- 川元祥一 (1990). 希望と草原—五郎兵衛用水物語—. 信州農村開発史研究所.
- 川元祥一 (1991). 被差別部落の生活と文化史. 三一書房.
- 小葉田淳 (1968). 日本鉾山史の研究. 岩波書店.
- 小松和彦 (1983). 魔と妖怪, 宮田登他編, 日本民俗文化体系 第4巻 神と仏. 小学館.
- 小松和彦 (1985). 新しい妖怪論のために. 創造の世界, Vol. 53, 6-25.
- 小松和彦 (1986). 鬼の玉手箱 民俗社会との交感. 青玄社.
- 小松和彦 (1995). 異人論 民俗社会の心性. 筑摩書房.

- 小松和彦 (2000). 鬼 解説, 小松和彦編, 怪異の民俗学 鬼. 河出書房出版.
- 三鬼清一郎 (1984). 近世初期における普請について. 名古屋大学文学部研究論文集, Vol. 89, 173-185.
- 三鬼清一郎 (1987). 普請と作事—大地と人間—, 朝尾直弘編, 生活感覚と社会. 233-258.
- 三浦圭一 (1981). 中世民衆生活史の研究. 思文閣史学叢書.
- 三浦圭一 (1984). 中世の土木と職人集団, 永原慶二・山口啓二編, 講座 日本技術の社会史 土木. 日本評論社.
- 三浦圭一 (1990). 日本中世賤民史の研究. 部落問題研究書.
- 宮本常一 (1987). 庶民の発見. 講談社学術文庫.
- 宮本常一 (1993a). 民俗学の旅. 講談社学術文庫.
- 宮本常一 (1993b). 生業の歴史. 未来社.
- 宮田登 (1977). 民俗宗教論の課題. 未来社.
- 宮田登 (1983). 民俗学研究法, 福田アジオ・宮田登編, 日本民俗学概論. 吉川弘文館.
- 宮田登 (1985). 新版 日本の民俗学. 国宝社.
- 水野絵夢・羽鳥剛史・藤井聡 (2008). 公共事業に関する賛否世論の心理要因分析. 素朴計画学研究・論文集, Vol. 25, No. 1, 39-57.
- 門馬幸夫 (1998). 柳田國男と被差別部落の問題, 差別と穢れの宗教研究. 岩田書店.
- 森栗茂一 (1995). 鬼と河童の差別論. 世界鬼学会会報, Vol. 1, 40-45.
- 森栗茂一 (2000). 境界を生きる河童. 民博, Vol. 102, 15-19.
- 森栗茂一 (2003). 河原町の歴史と都市民俗学. 明石書店.
- 長尾義三 (1985). 物語日本の土木史大地を築いた男たち. 鹿島出版会.
- 中尾聡史・宮川愛由・藤井聡 (2015). 日本における土木に対する否定的意識に関する民俗学的研究. 実践政策学, Vol. 1, No. 1, 37-52.
- 中尾聡史・森栗茂一・藤井聡 (2016). 河童の民話における土木技術者の位置づけに関する民俗学的研究. 実践政策学, Vol. 2, No. 1, 45-52.
- 大石久和 (2012). 国土と日本人 災害大国の生き方. 中央新書.
- 大石慎三郎 (1968). 近世村落と構造と家制度. お茶の水書房.
- 折口信夫 (1966). 鬼の話, 折口信夫全集 第3巻. 中央公論者.
- 折口信夫 (1976). 春来る鬼, 折口信夫集 第16巻. 中公文庫.
- 笹本正治 (1988). 戦国大名と職人. 吉川弘文館.
- 斎藤洋一 (1990). 五郎兵衛用水の掘貫を掘ったのは誰か. 水と村の歴史, Vol. 6, 39-71.
- 渋沢敬三 (1992). 本邦工業史に関する一考察, 渋沢敬三著作集〈第一巻〉祭魚洞雑録. 平凡社.
- 高橋裕 (2016). 第一回・土木史サロン特別講演 土木史的思考の意義と役割. 土木学会誌, Vol. 101, No. 4, 14-17.
- 田中皓介・神田祐亮・藤井聡 (2013a). 公共政策に関する大手新聞社報道についての時系列分析. 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol. 69, No. 5, 373-379.
- 田中皓介・中野剛志・藤井聡 (2013b). 公共政策に関する大手新聞社説の論調についての定量的物語分析. 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol. 69, No. 5, 353-361.
- 田中皓介・神田祐亮 (2014). 公共政策を巡る各種言葉のイメージ変化要因に関するパネル分析. 土木学会論文集 F4 (建設マネジメント), Vol. 70, No. 4, 13-25.
- 田中皓介・藤井聡 (2015). 1950年代から現代までの公共事業を巡る新聞社説についての時系列分析. 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol. 71, No. 5, 143-149.
- 若尾五雄 (1981). 鬼伝説の研究—金工史の視点から—. 大和書房.
- 若尾五雄 (1985). 金属・鬼・人柱その他—物質と技術のフォークロア—. 星雲社.
- 若尾五雄 (1989). 河童の荒魂 河童は渦巻である. 堺屋図書.
- 柳田国男 (1975). 毛坊主考, 近代日本思想体系 14 柳田國男集. 筑摩書房.
- 柳田国男 (1998). 郷土生活の研究法, 柳田國男集 8. 筑摩書房.
- 矢野晋哉・藤井聡・須田日出男・北村隆一 (2003). 土木事業に関する賛否世論の心理要因分析. 土木計画学研究・論文集, Vol. 20, No. 1, 43-50.

Abstract

In this study, for better understanding of the roots of social bias against civil engineers in modern Japanese society, folklore research about civil engineers in Japanese history were surveyed in terms of oni, including research performed by Itsuo Wakao, who is a pioneer of Japanese non-agricultural culture research. First, folklore studies on civil engineers were reviewed. These studies suggest that civil engineers were categorized as non-farmers, which also included other groups of people such as vagabonds and social outcasts. As non-farmers, these people have not been the main subject of Japanese folklore studies. Second, existing legends about the exterminations of oni were reviewed, which suggest that mineworkers, who were categorized as non-farmers, were called oni. Certain mining technologies were diverted into tunnel mining in gorobe irrigation channels, which falls under civil engineering. Through these reviews, this research indicates the possibility of civil engineers being called oni.

(受稿：2017年9月12日 受理：2017年12月13日)